session 3
CBL所蔵資料を読む
絵巻物

eajrs
European Association of Japanese Resource Specialists 日本資料専門家欧州協会

National Institute of Japanese Literature
National Institutes for the Humanities
Inter-University Research Institute Corporation

朝比奈物語絵巻 CBLJ1132
勉誠社出版物参考

【書誌】

写本。巻子1軸。外題は金綾地題箋に「朝日奈物かたり」、内題なし。31.2×880cm。

2通の附属文書があり、1通は「朝比奈物語　前大部分住吉具慶補足　奥一切れ土佐光信筆の申伝」とあり、もう1通に「土佐光信筆　朝比奈物かたり　前数節住吉具慶補足」と記されている。

中世以前制作の絵巻物断簡の前後に、近世以降になって新たに絵と詞書を継ぎ足したものと考えられる。

（参考　書画贋物語）

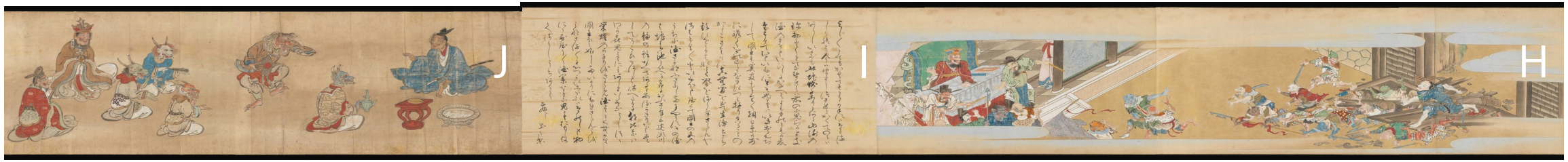
また、此の『極め』に『當嵌め』と云ふ事がある。古筆切は素より前後を切つたものであるから落欵が無いので、其の文句の内に何かあれば夫れを種に人のよく知つて居る名を書いて、夫れに當て嵌めて置くのである。

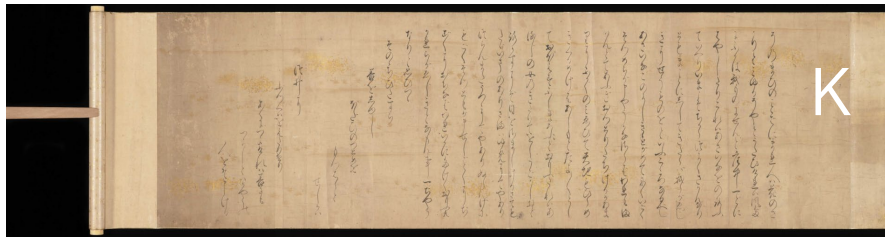
恁麼風だから、今では古來の鑑定家の『極め』を信ずるものは尠く、什麼に極めてあつても餘り信頼せぬやうになつて來た。で、其の鑑定の標準ともなるべき『手鏡の極め』を信ずるものなどは殆んど無くなつて了ひ、遂には『極め』の『極め』が出來て、其のまた『極め』がなくてはならぬやうになつて了つたのである。

【テキスト】

※『朝比奈物語絵巻』Asaina monogatari (朝比奈物語絵巻), CBL J 1132
https://viewer.cbl.ie/viewer/image/J_1132/1/
24枚中の2・5・6・9・10・20・21・22のPart

現状





継紙部分の修正

あらすじ

【内容】

『朝比奈物語絵巻』は、東京大学国文学研究室所蔵奈良絵本『あさひな』とも別系統で、他に類本を見ない。以下粗筋。

三国に比類無い怪力の朝比奈は、十字堂に参詣して地獄の鬼との力競べを祈念する（ＡＢ）

帰途に立ち寄った酒家で大酒を喰らい、空の酒樽を枕に寝そべっていた。すると人声さざめき、周囲で小鬼達が酩酊ぶりを嘲り笑っている（ＥＦ）

怒った朝比奈は躍り出で木の葉のように逃げゆく小鬼達を五、六十里程の山野に追い、大川を泳ぎ越え（ＧＤ）

あらすじ

ついに峨々（がが）たる巌に雲を凌ぐ黒鉄色の地獄の城門にたどりつく。閻魔王の下知により数多の鬼がありとあらゆる兵具で固めて聳え立つ城門は、剣の山をも抜く朝比奈の怪力によって破られ、振るう太刀風に鬼達は敗走し、閻魔王・冥官は天を仰いで極楽に救いを求める（CH）

朝比奈は閻魔王等を許すかわりに山海の珍物と美酒のもてなしを命じ、贅を尽くし心を遣った酒宴の席で栄耀の限りを尽くす。朝比奈を前に、鬼の舞踊が始まった（IJ）

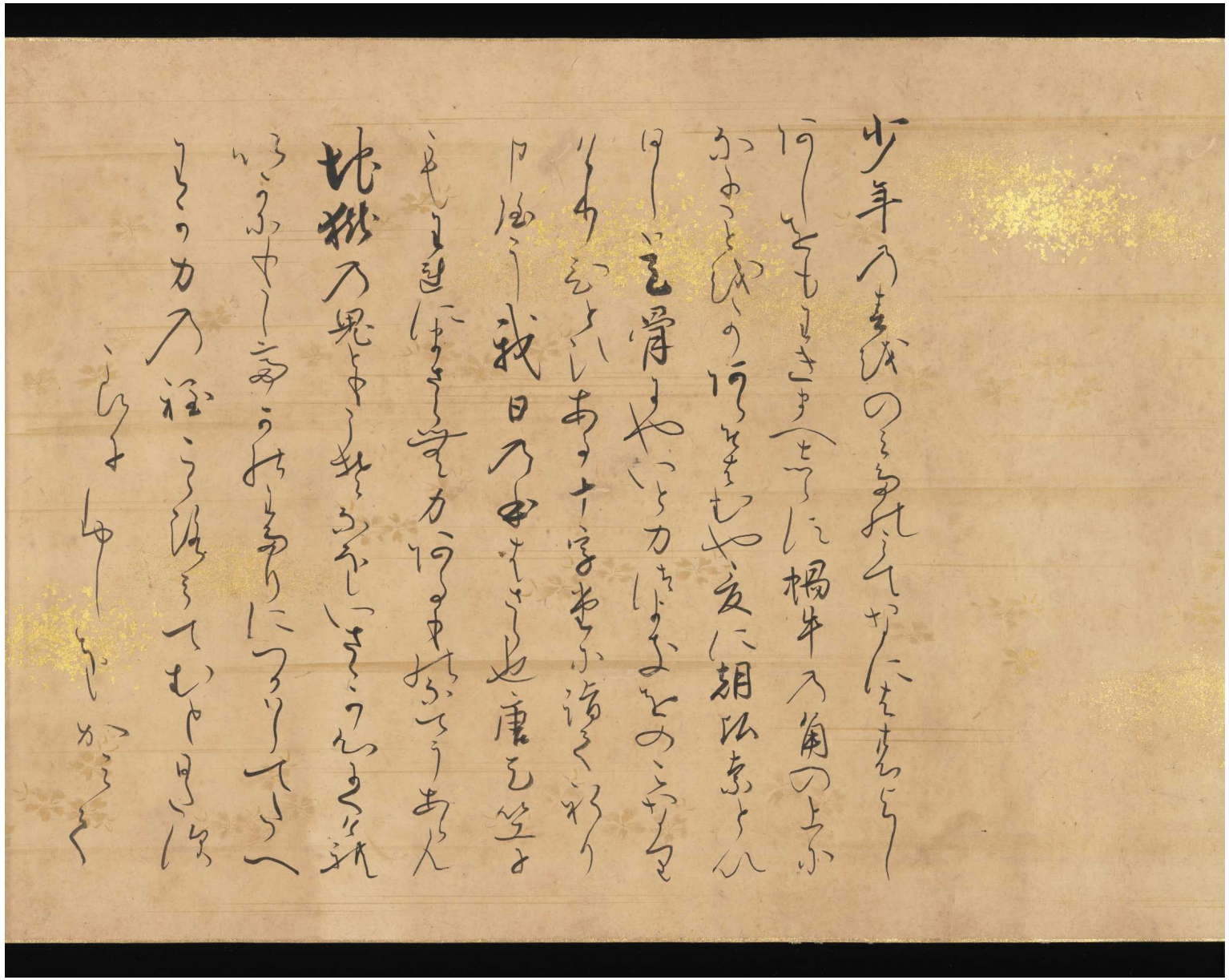
「今は力強く盛りであっても、死んで地獄へ堕ちたならば餌食とし
ようと」という呪いの歌に、朝比奈
が返舞しようと扇を取って立ち上
がる目眩に夢から目覚める。朝比
奈はこれに生死無常を悟り、善を
なし菩提の勤めを怠ることなかっ
たので仏果を得たという（K）。

＊邯鄲一炊の夢の趣向

人物絵

Asaina monogatari (朝比奈物語絵巻), CBL J 1132_No.2

A



〔朝日奈物かたり〕

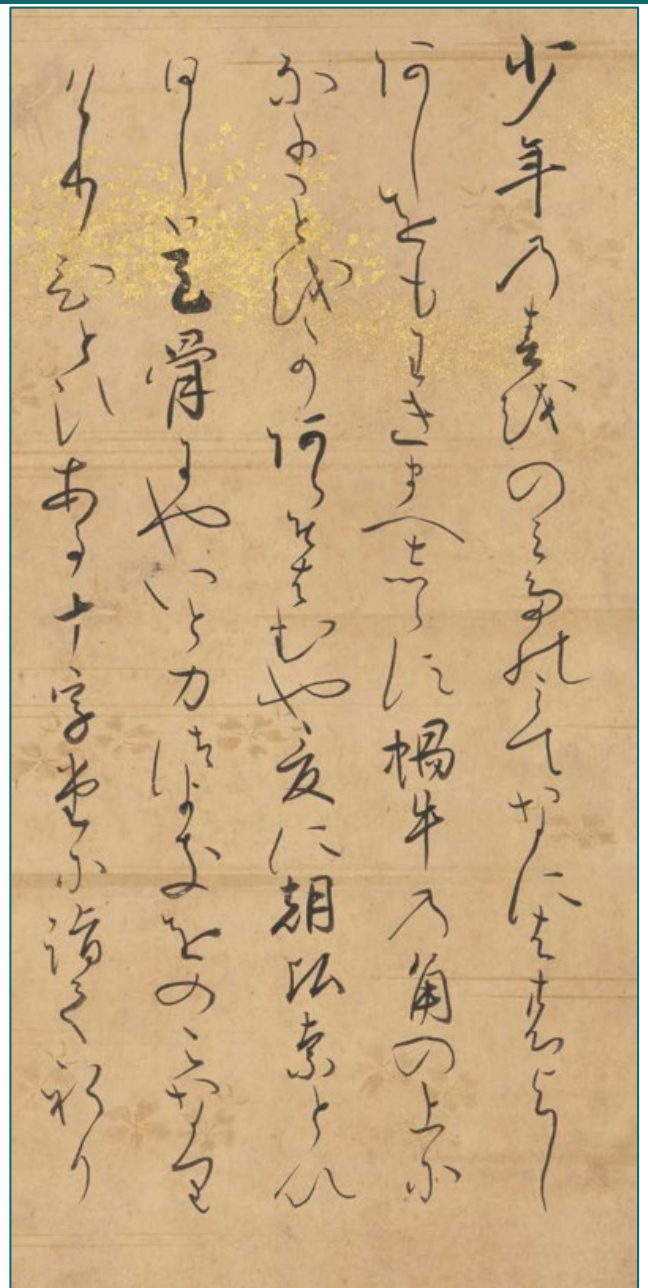
少年の春をのみたのみて

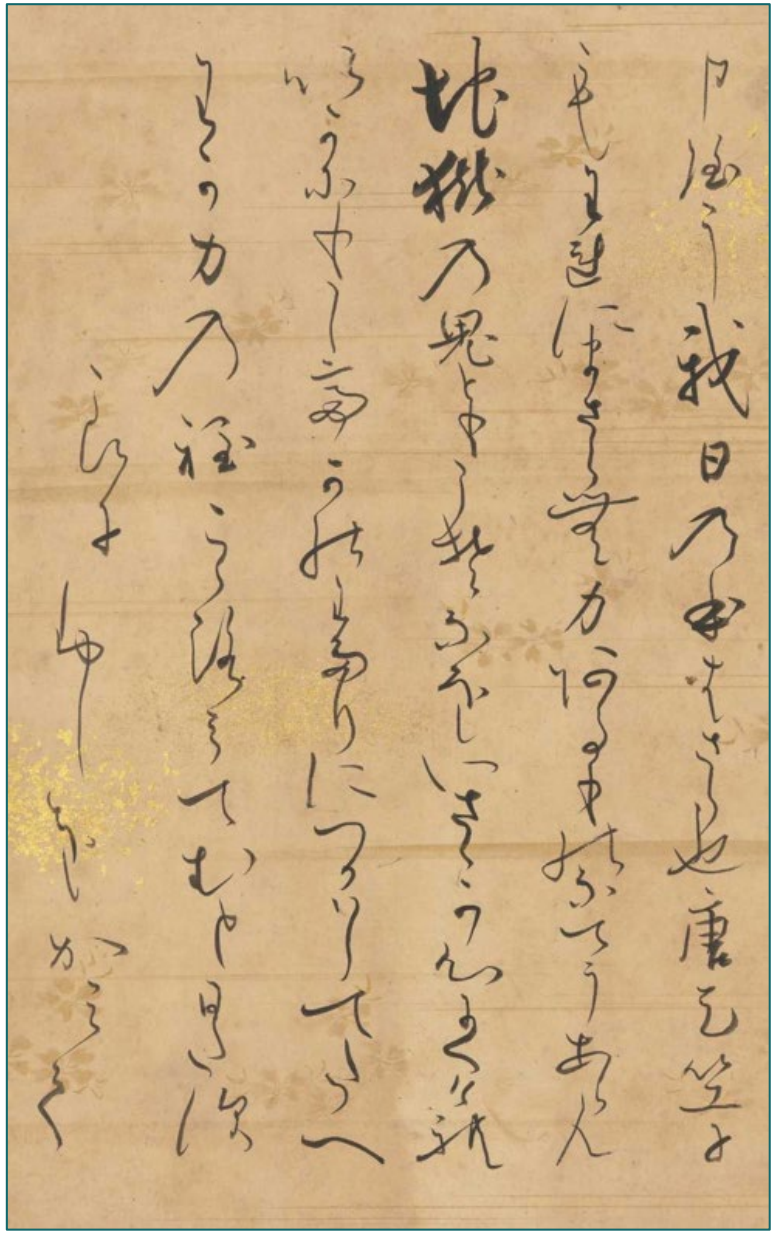
蝸牛の角の上に

爰に朝比奈とい

ひし武骨にや

ひとひある十字堂に詣て祈り





地獄の鬼どもこそなをいさゝか心にくけれ

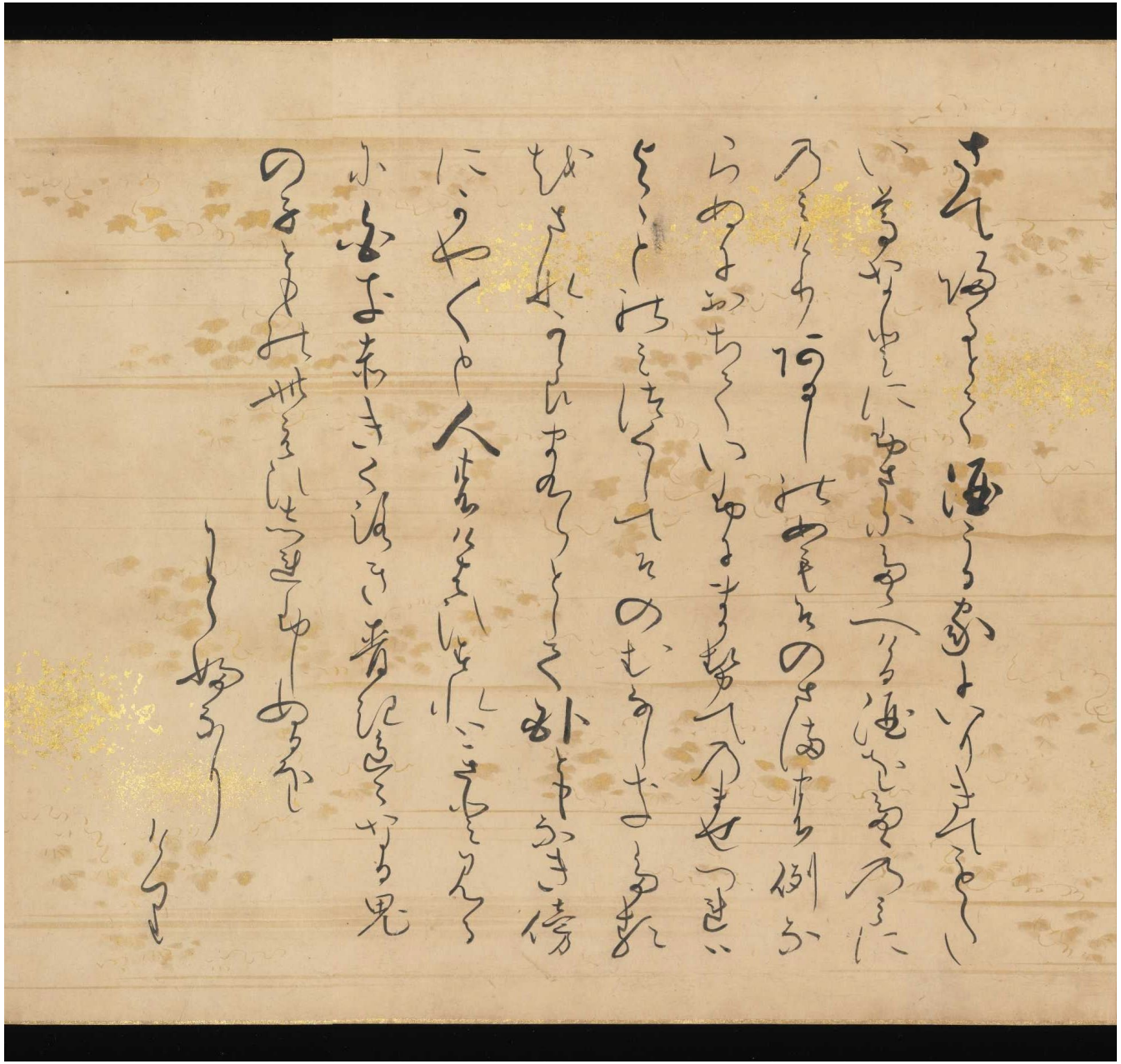
わが力の程

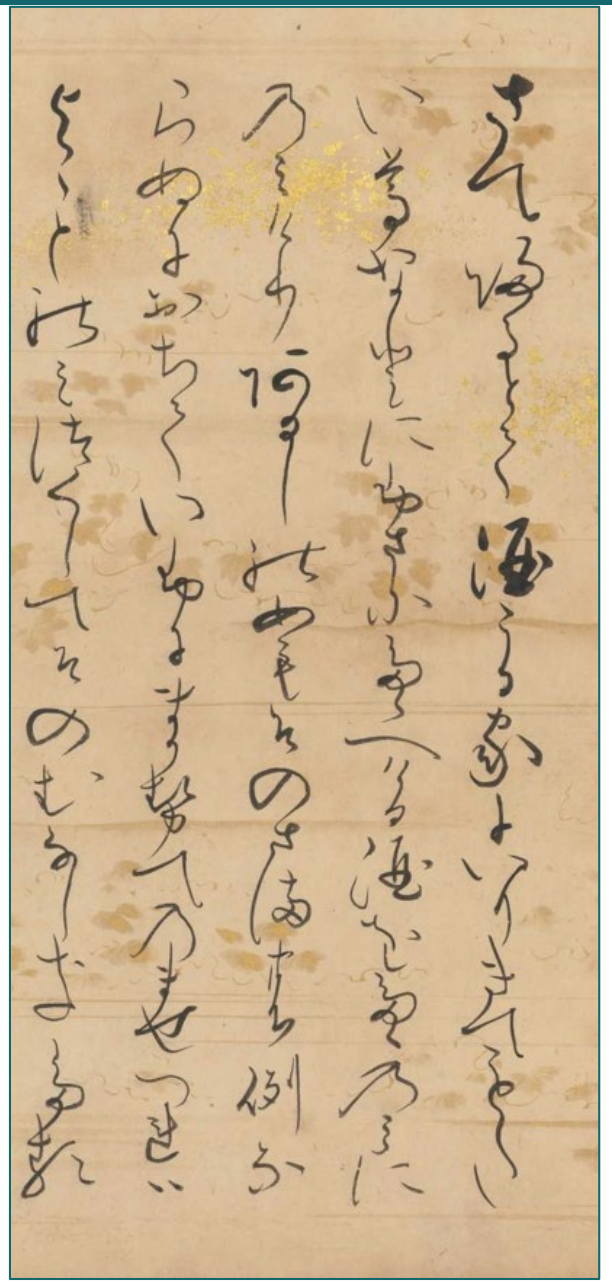
〔朝日奈物かたり〕

少年の春をのみたのみてなにはのよし
あしをもわきまへしらず蝸牛の角の上に
なにごとをかあらそはむや爰に朝比奈とい
ひし武骨にやいと力つよきをのこなり
けりひとひある十字堂に詣て祈り
申やう我日の本はさら也唐天竺に
もわれにまさらむ力あるものなでうあらん
地獄の鬼どもこそなをいさゝか心にくけれ
いかにもしてかのわたりにつかはしてたべ
わが力の程こゝろみてむとひたす
らにふしをがみて

【絵】

蝸牛角上の争い（かぎゅうかくじょうのあらそい）





さて　　もた

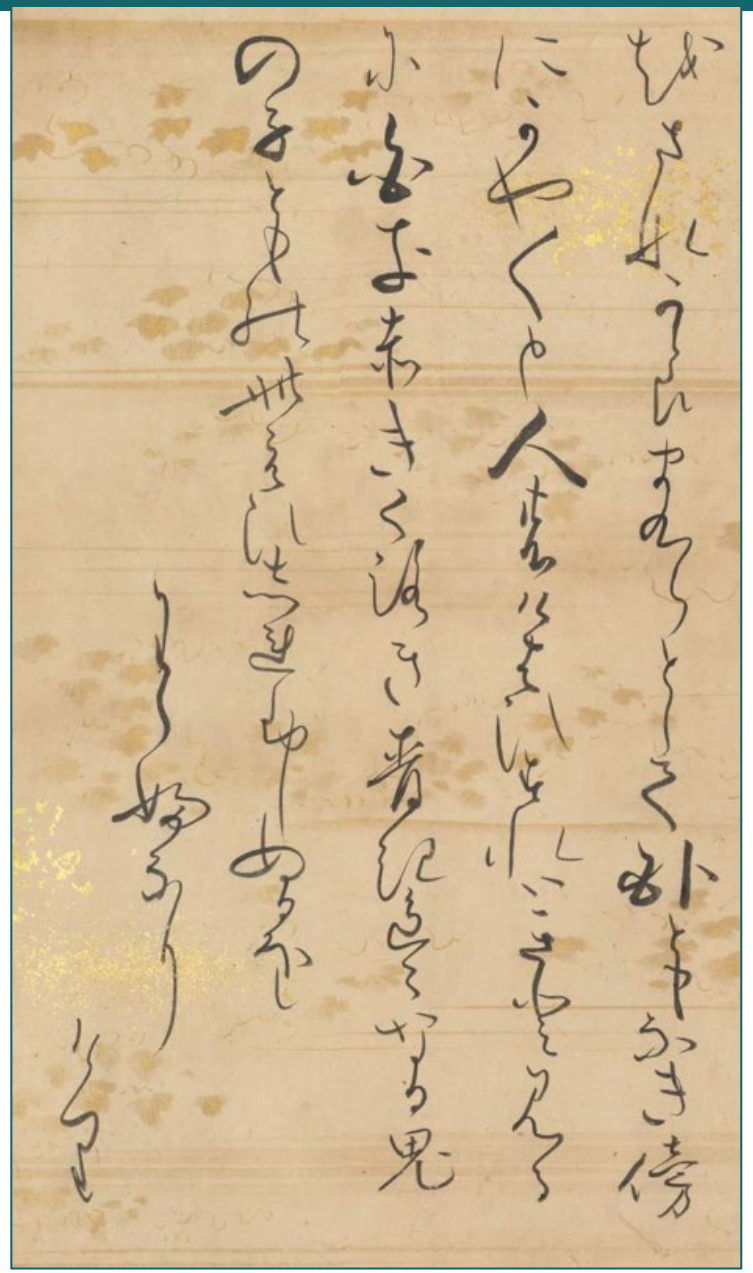
い尊などにふさにたゝへける酒をたゞのみに

のみけり

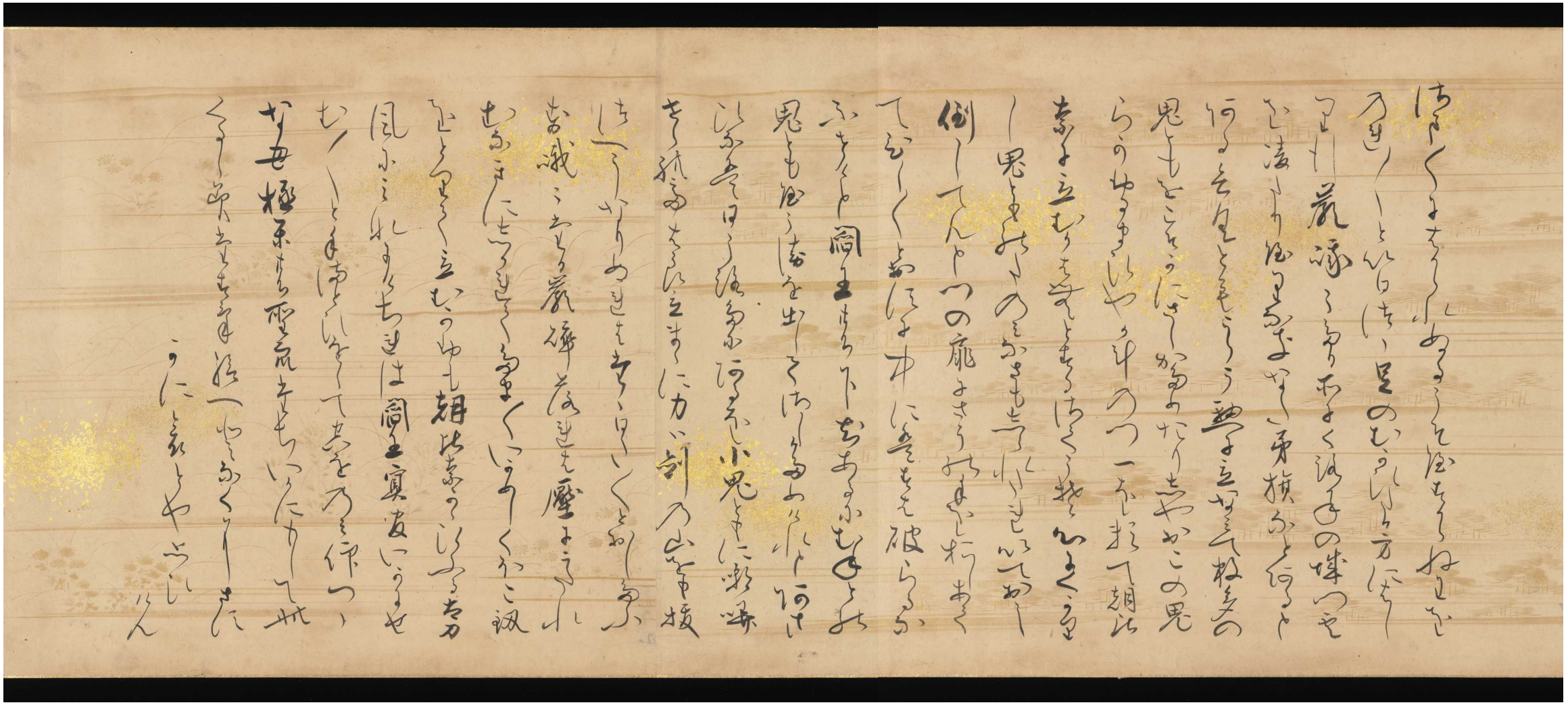
いふにまかせてのませつれば

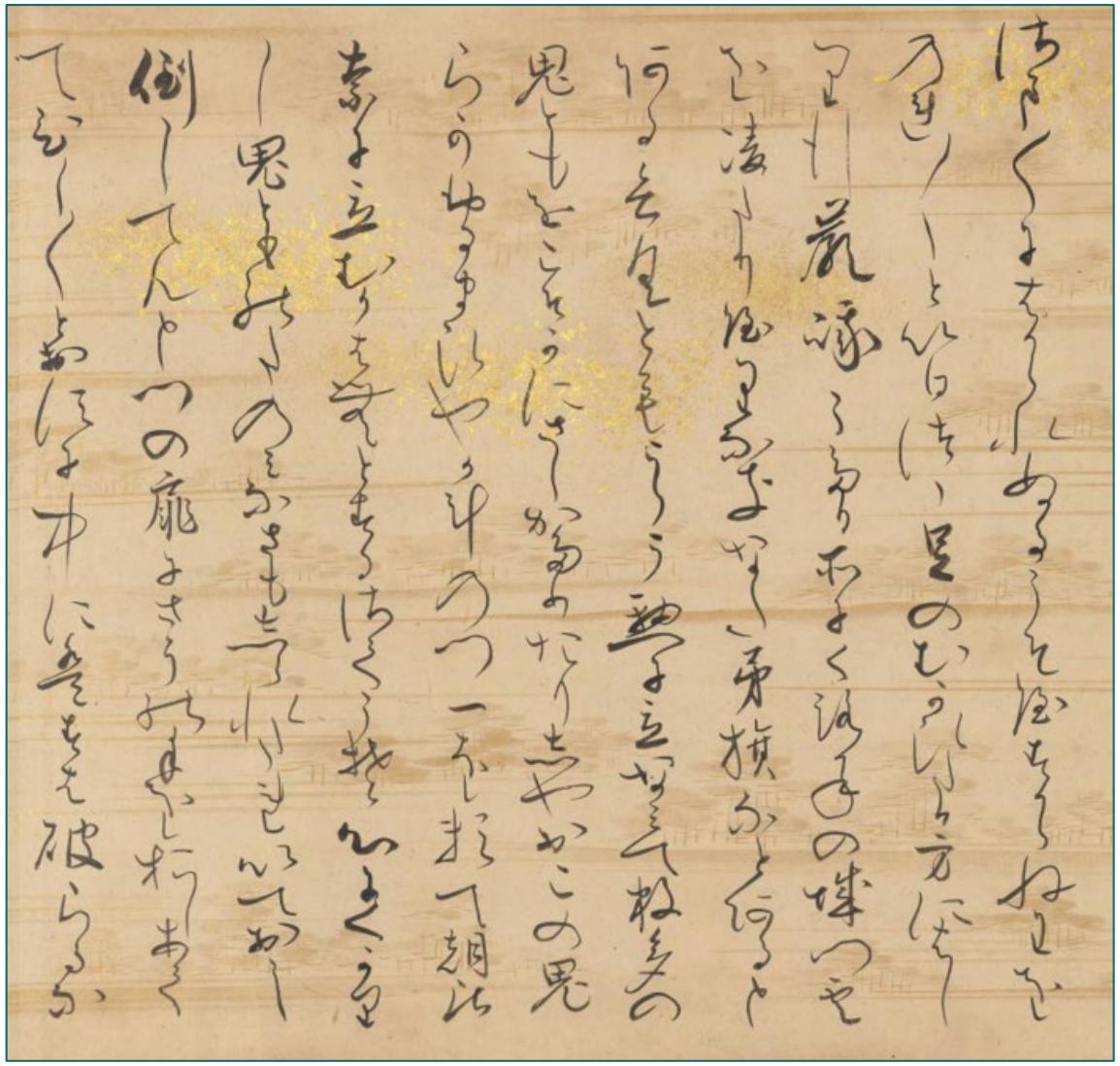
よゝとのみつくしてそのむなしきたる

を□臥ともなき傍
にがや〳〵と□きと見る
に白き赤きくろき青き色々なる鬼
の子どもの□を
わらふなりけり

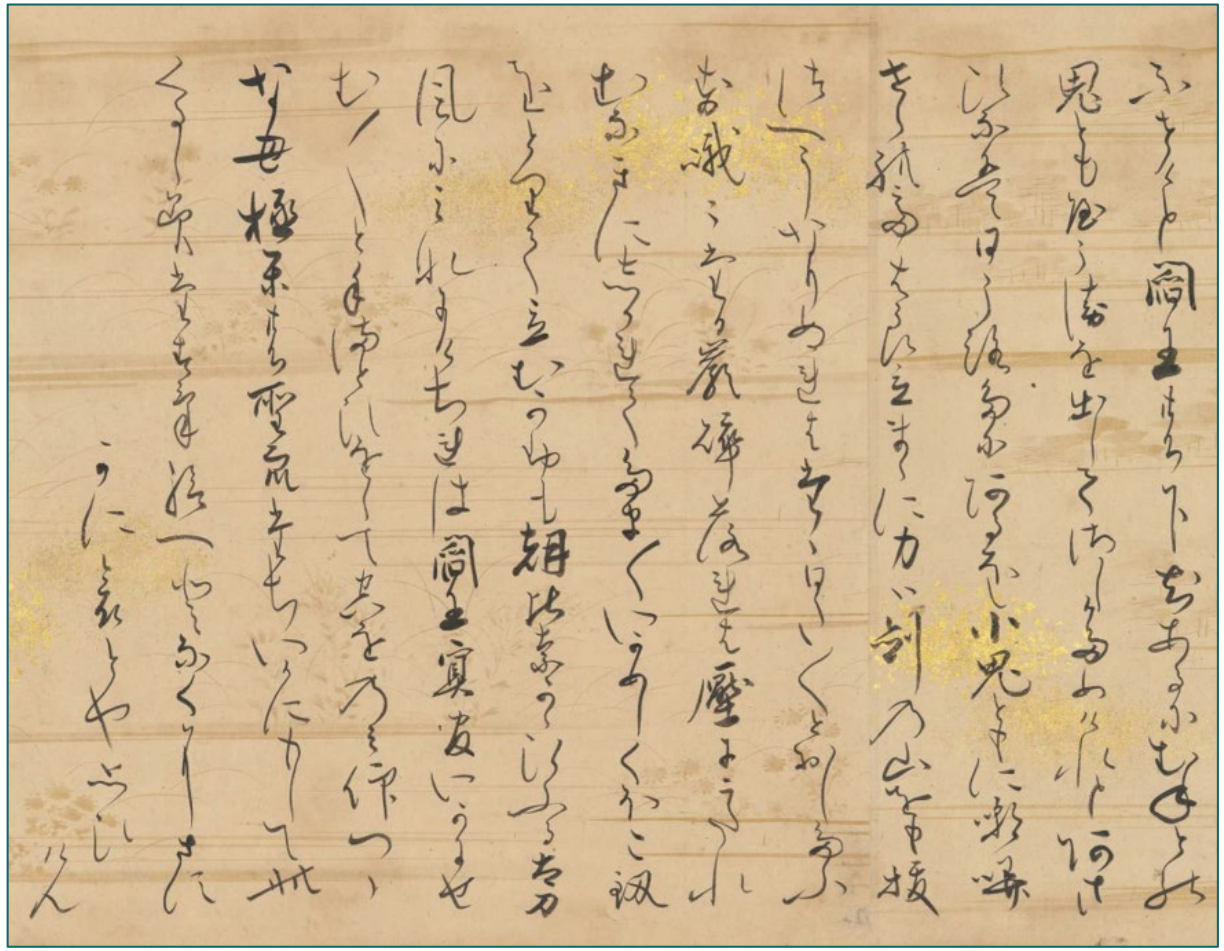


さて帰るとて酒うる家にいりきてもたい（甕）尊（樽）などにふさに（多さに）たゝへける酒をたゞのみにのみけりあるじの女もそのさまの例ならぬにおぢていふにまかせてのませつればよゝとのみつくしてそのむなしきたるをさながらまくらとして臥ともなき傍にがや／＼と人のけはひすればきと見るに白き赤きくろき青き色々なる鬼の子どもの此えひしれふしぬるをわらふなりけり





さま〳〵に[illegible]をのれ〳〵といひつゝ足のむかひたる方にはしり行巌碌々たる所に[illegible]らしう均一に立なみて数多の鬼どもをごそかにさしかためたりしや おこの鬼らがふるまひ也 か斗の門一を頼て朝比奈に立むかはむとする さてこそ心にくかりし鬼どものたのみなさもしられたれ いでおし倒してんと[illegible]てひし〳〵とおすに中には すは破らるな

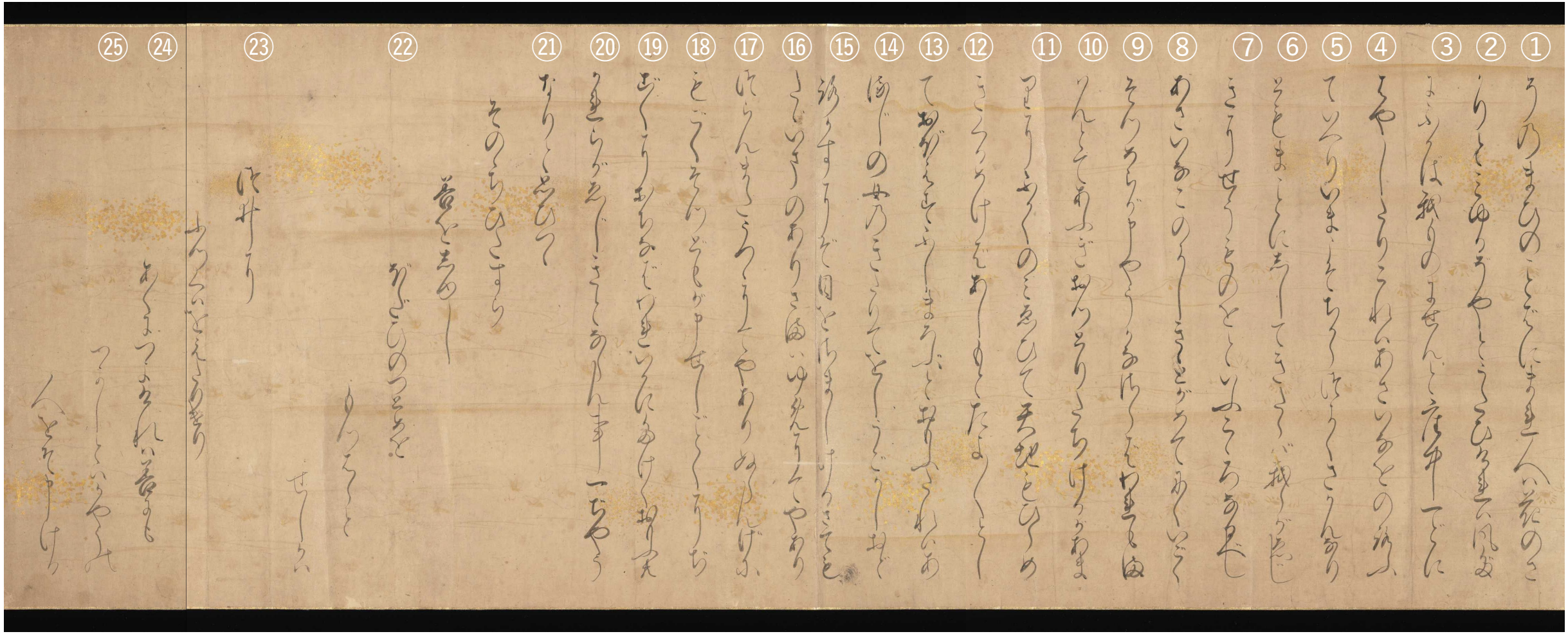


ふせげと閻王の下知あるに むねとの
鬼どもやう衛を出してさしかためけれど あさ
ひなはひごろだにあるを小鬼どもに嘲笑
せられて

たゝひた／＼とおしたふ
す 峨々たる巌砕落れば圧にうたれ
むなぎにしかれて たま／＼いかめしくほこ剣
をとりて立むかふも 朝比奈がゝひふる太刀
風にみなにげちれば閻王冥官いかにせ
む／＼と手まどひしをして空をのみ仰つゝ

さま／＼にはかられぬるこそやすからねばを＊のれ／＼といひつゝ足のむかひたる方にはし＊り行巌碌々たる所にくろがねの城門雲＊を凌たりやりなぎなた矛旗などあると＊ある兵具どもらしう惣に立なみて数多の＊鬼どもをごそかにさしかためたりしや おこの鬼＊らがふるまひ也か斗の門一を頼て朝比＊奈に立むかはむとする さてこそ心にくかり＊し鬼どものたのみなさもしられたれ いでおし＊倒してんと門の扉にさう（左右）の手をおしあて＊てひし／＼とおすに中には すは破らるな＊ふせげと閻王の下知あるに むねと（宗徒）の＊鬼どもやう衛を出してさしかためけれど あさひなはひごろだにあるを小鬼どもに嘲笑＊せられて はら立まゝに力は剣の山をも抜＊つべうなりぬれば たゝひた／＼とおしたふ＊す 峨々たる巌砕落れば圧にうたれ＊むなぎ（棟木）にしかれて たま／＼いかめしくほこ剣＊をとりて立むかふも 朝比奈がかひふる（掻振）太刀＊風にみなにげちれば閻王冥官いかにせ＊む／＼と手まどひしをして空をのみ仰つゝ＊なも極楽の聖衆たちいかにもして此＊くるしみたすけ給へとなくにさす＊がに哀とや思ひけん

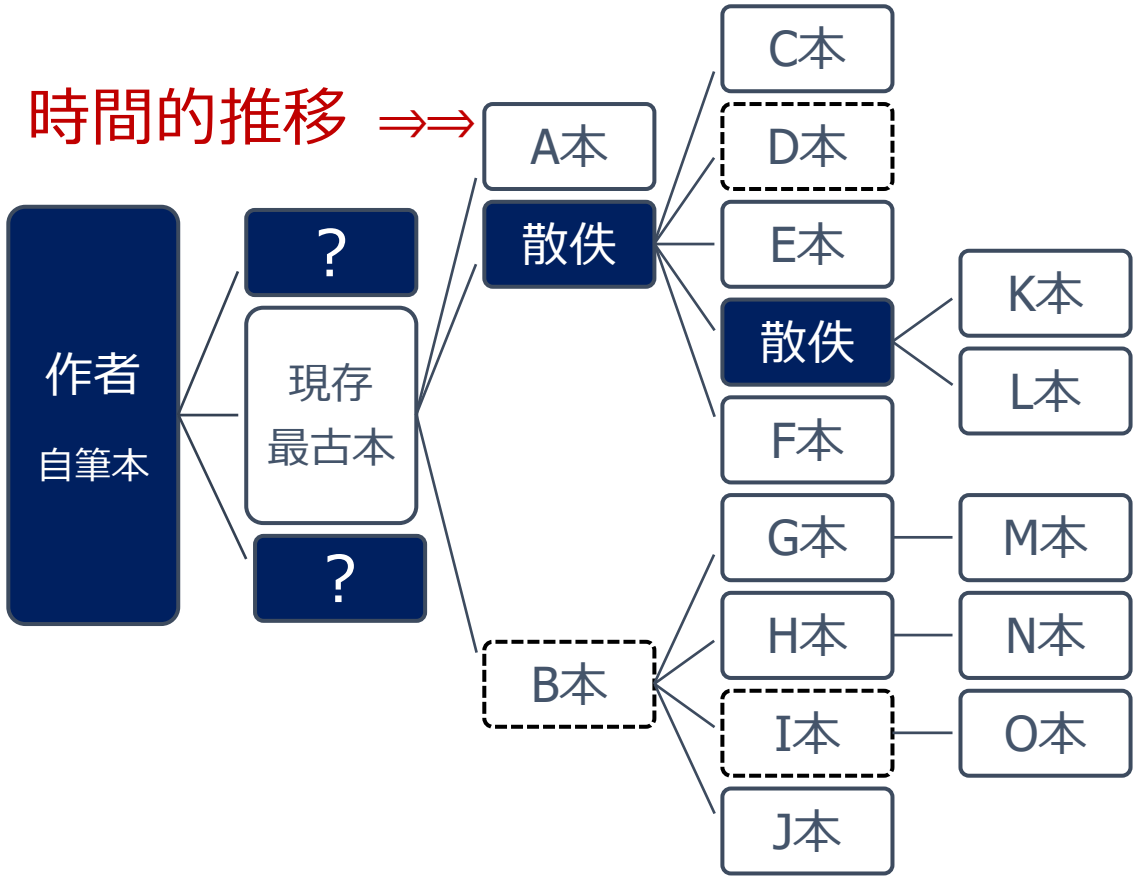
〔練習〕



①そのまひのことばにまれ人は花のさか
②りとみゆるぞやとうたひければ風だ
③にふかば我ものにせんと座中一どに
④はやしたりこれはあさいなをのろふ
⑤ていへりいまこそちからつよくさかんなり
⑥ともまことにししてきたらば我らがゑじ
⑦きにせうものをといふこゝろなるべし
⑧あさいなこのよしきゝとがめてにくいごく
⑨そつめらが申やうかなさらばわれもま
⑩はんとてあふぎおつとりたちけるがあま
⑪りにふかくのみゑひて天地もひらめ
⑫きくるめけばあしもとたよ／＼とし
⑬ておぼえずふしまろぶとおもふたればあ
⑭るじの女のきたりてをしうごかしおど
⑮ろかすにぞ目をさましけるさても
⑯たゞいまのありさまはゆめにてやあり
⑰つらんまたうつゝにてやありぬらんげに
⑱もごくそつどもが申せしごとくにぢ
⑲ごくにおちなばわれいかにたけくおもふ共
⑳かれらがゑじきとならん事一ぢやう
㉑なりと思ひて
そのゝちひたすら答をしゆし
㉒ぼだひのつとめをもつぱらとせしかば
㉓つゐにぶつくはをえたりけり
㉔あくにつよければ善にも
㉕つよしとはかやうの人をぞ申ける

日本文学研究（写本研究）の特質

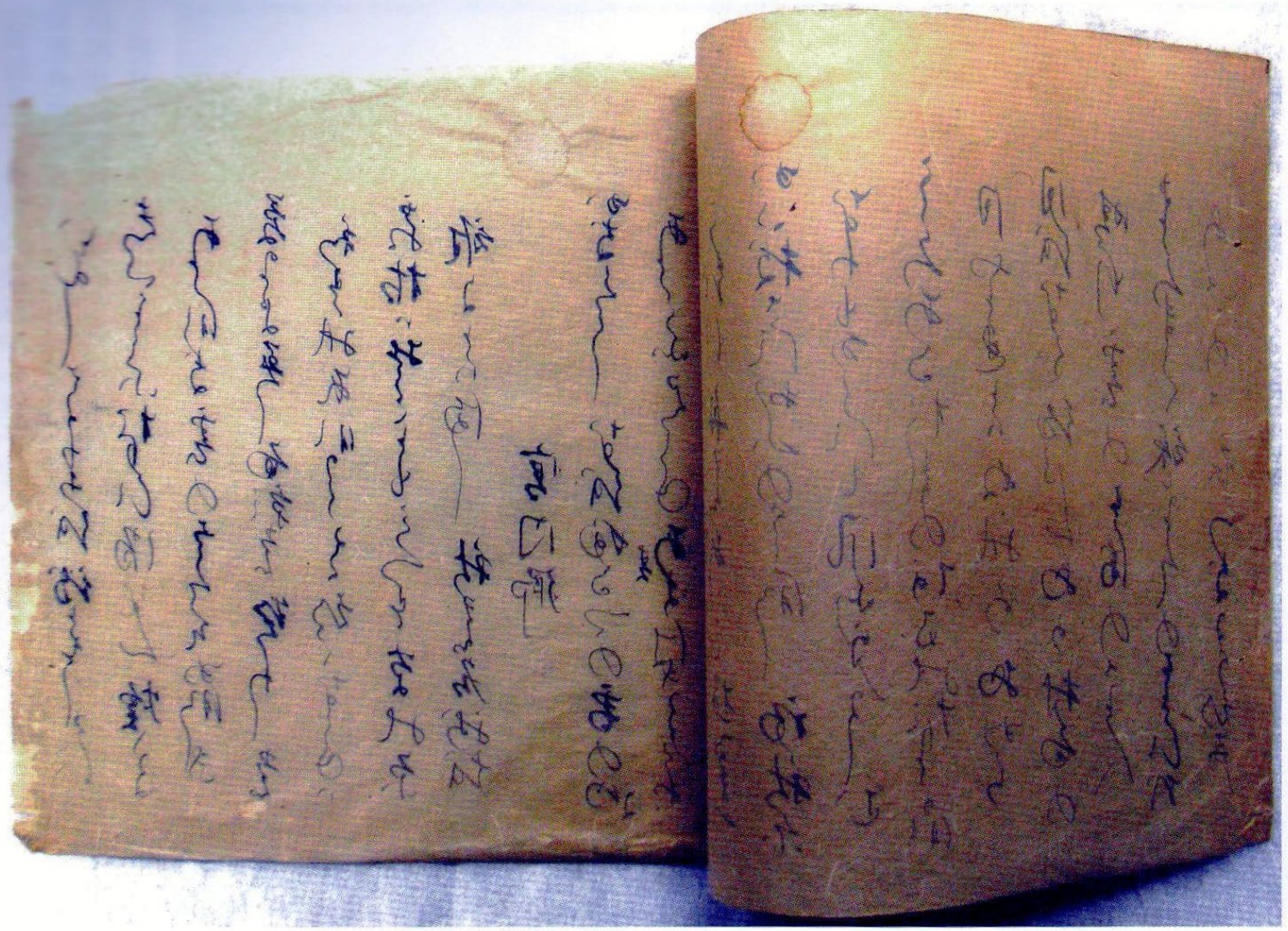
書かれたモノは一定ではない



※写すたびに異本が派生（目移、誤写）
※完本残存とは限らない
※意味を考えず書写多
（可読性を無視）
※時代の推定
※料紙・顔料の分析
※欠落を埋める　時には贋作も
※鑑定の意味（極め札・箱書）
　モノの保証ではない
※稀書複製会物・コロタイプ印刷物

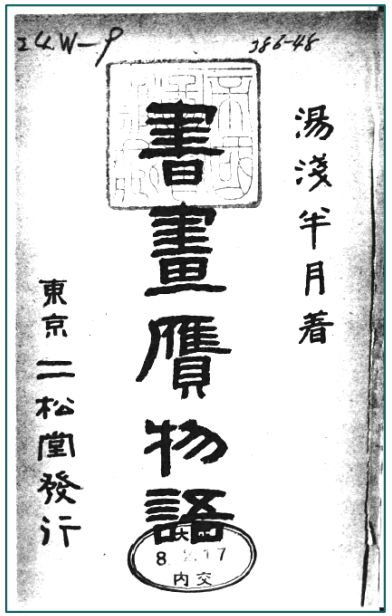
こうしたことも可能なので（書画の世界）

相剥ぎの例（書物学十九号掲載写真）



【図版④】…相剥ぎの例。「自讃歌断簡」〔江戸前期〕写1紙（個人蔵）。斐紙を表裏二枚に剥いでいるところ。楮紙でも可能であるが、あまりに薄い紙は難しい。

湯浅半月『書画贋物語』より https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/961413



此の古色にも贋造があつて、例へば紙に煤をひいて新らしく舊い紙を製造したり、裏面からたゝいて柔かにして年數を經た調子を作つたりするのである。現に此の煤を曲物に入れて一合八九錢で賣つて居る。又、金箔に古色をつけるには硫黄で燒いて製造し、蝕いは虫の喰つた古い紙を手本として傍におき線香の火で燒き拔きながら寫生して拵へるのであると云ふ。殊に面白いのは落款の印を古くする事で、新らしく捺した印の油をとるには濡れた白布を上に置いて燒鏝でそつとこするのである、一度こすると大正から天保になり、も一度磨すると寛永、も一度こすると慶長以前足利時代になつて遂には鎌倉、藤原、天平時代までも行く事が出來ると云ふ、開處で、華山や竹田が寛永慶長になつたり應擧や蕪村が鎌倉時代になつてはあまりに行き過ぎるから、いゝかげんにして置くのであると云ふ。

古色談の序に是非云はねばならぬ事は浮世繪の話である、此の浮世繪は吾邦特有の繪畫であるが、其の圖柄は勿論、殊に彩色の古色で價を保つて居るのである。

外國人が錦繪を買ふのに、同じ圖柄で一枚に何百圖を出すのもあれば、また二三圖にも買はないのもある、之れは其の圖柄の珍しいばかりではなく、古色のつき具合と彩色の褪め工合によつて何とも云ひ樣のない書があるからで、之れは殆んど天然の仕業であつて、二枚と同じ古色のある筈もなく、眞に得難き美術であるから夫れを高く買ふのである、然るに吾邦の商人は夫れに氣がつかず、浮世繪の最も大切な古色を洗つて巧に色を注し綺麗にさへして置けば高價に賣れると思つて居る。廣重の繪の雨の景色や夜景の如きは其の古色によつて實に云ふに云はれぬ氣分が出て居るので、其の古色が賞美されるのである、外國の美術家が浮世繪の眞筆よりも版畫の方を喧しく云ふのは人工でなく時代の仕業を買ふのであるから、今猶吾邦の浮世繪通が此の古色に氣がつかず唯初版と後刷りとを鑑定して、綺麗な繪をのみ賞賛して居るなどは餘りに淺薄であると云はねばならぬ。

それではこのセッションを終わりにします